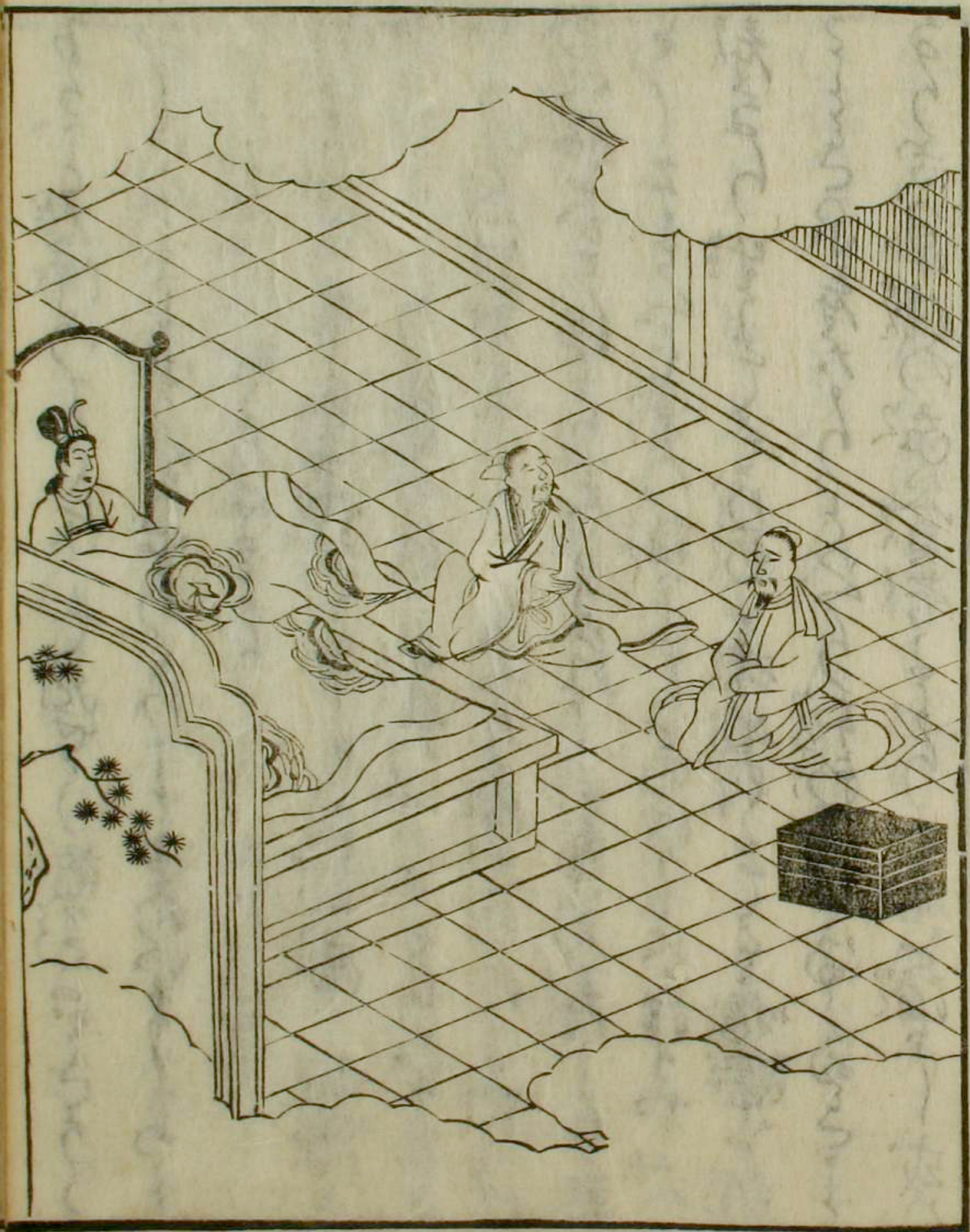


婦人六心巻起集
江戸

ヤ 9
961
3





の後 瀰瘧の母疾の病の母のりきも終るその病は
 案し 葉と胎用と一好んで下と下り許す
 薇その婦人胎漏 血下るやまひし
 てやまひ許すをさし胎と葉と一りすあて
 一とさやうとこれと下らんを胎と葉と一りてこれ
 と謀り 薛己のいよく 佛の教と胎と一りめ終る
 安らうてなればら安らうて安らうてらんを
 むらう胎らんを自他と一りて一と胎と一
 りのり信せしめて 女科醫師よゆてみて半胎と
 もつて胎と一りて葉と一りて胎と一りて胎と一り
 胞衣らうさゆまのりて 香極教と一りめ血暴ら

のぼりまじりしままに新産されし暫樹のあつこ
てんけのり終るゆとあられむむととをばりて
たんとこれれりはとまどくちるへ一都鄙の茶
肆の霜の清胎の茶と調合して服せ服せ家
らそそひるめしこれれりまじりしとをばりて
こして心業とやめしむとてひり一東京の白
牡丹といふ美人あり胎胎の茶と調合して服せ
てとてさうらうりこれれりまじりしとをばりて
貧くたまりつ綱續たて死する樹のやまじりまめく
の小鬼ありて胎の毛髪と引ぬくとて産言して

死せりし美堅志といふ書ありてこの胎胎の茶
新産のほり胎胎の茶と調合して服せり
とてつとてしたり
○新産の茶を并り茶治の流子今方婦人今方女
科準繩ありしとてさうり薛この流子新産の茶を
めく増鷹の茶をこれと服して害とるは
のありし産の害の新産の害とては張羅修茶
恒産の茶といふ新産の茶と服して形體とて
一勞役のありしとては痛む或は陽のあつこ
たりと婦人の病とては冷し帯巾の病とては腰
冷痛し是膝痿弱の病とてはたまり新産の茶

わらわくは男女をよは服らるるをわらわく

胎内形體の現

○婦人良あよわく又胎内者者備と備と
るあり妊婦一月六珠あり二月の批の
こし三月の男女う四月の形象自
月六胎育あり六月の毛髪生は七月の
遊んて思うくたのまを動と八月の
て思うく右のまを動と九月の
十月の形象とあり陳自明の
説と推察るよこれ鄙談あり論



冬と云はつゝは

○妊娠四月から一ヶ月水精より血脈と云はるは
少陽の脈のやうなやうな少陽の脈と云はるは四月
の時胃上の腑に和めるなれたる形体と云はるは
心志と和柔せしめ飲食と節よはし一掃種飲食
一真厚と食と一少の少陽の脈の中より
子針各と云はつゝは

○妊娠五月始く大槓よりして子宮と云はるは胎
要く和柔し海胎として衣とあはし居ると深し
を衣服とあはしと一是の大陰の脈の中より
不月の時胃上の腑に和める大は錢るやうな

飲りまれば乾燥の如く食するはなれば大は勞倦と
りまれば縮聚と食し是の大陰の脈に針灸は
と云はつゝは

○妊娠六月始く金精よりして子宮と云はるは胎
く勞倦一節よはしとあはしと一是の大陰の脈の中より
る一是の陽明の脈に和めるは六月の時
鬼のは目とれぬる味と云はるは耳義和と食はし
これと和めるは是の陽明の脈に和めるは
針灸と云はつゝは

○妊娠七月から一ヶ月木精よりして子宮と云はるは胎
屈伸して血と云はるは一居るは必はるは

若くはよして脾胃を損するありいと人々胎禁の薬
を海より一々恐るるもいふべしと古今醫統の
せり

○素問六元紀大論に婦人重身毒之不行曰有故無
殞亦無殞やと云りけり人の婦人胎孕ありて或
えり積聚のやまひあり或は熱病温瘧のそく
ひ或は傷食するものそくひの暴病の時を治する薬
これ胎禁の類として墮胎のうれいありとされや
これを用てそのやまひを治するも胎平安のし
とやまひされりとのもこれ胎禁の薬類に類す
とすのころはよ物よあつて胎を殺さずけり

これとあはれ損ふこと薬損さしと妊婦と損
せしめりとも胎中の鬼を損せしめりとの義
下の文の大積大聚と云はしと大毒を分ること
と云ふ一めくいひむらものいふことと殺あひて人
物守されん胎禁の薬を用てあつるものりて損
し大毒とれと云ふ一めくわむとあはれと云ふ一用
の胎と墮落するもの必せりを云ふ妊婦食積の症
どうれり時食滯と消導する薬を用ても瘧
の暴病おとらふる熱大毒やじ時中わの薬を用
て胎墮とて瘧粉漸くよ愈す一とすの物
とすも消守胎禁の薬類を用る時胎を

為醫者陳亮通といふ人の書と云ふるよる醫書これ
 醫家ノ痛といふ部痛のいふ連よ茶と云ふりとい
 よし懐妊の脈なり且看實せし男子と云つし
 則茶と云りといけし男子と看せりといふは
 よりせしり云ん乃悦よ茶と服せしこれ中醫
 なりといわれし人といふなりよ茶と服しといふ
 いふんや妊婦と云つしむしといふん妊婦の治法
 といふと云ふし血と云ふは身熱と云ふし脾胃と云ふは
 先づいし痛あり時よありよ茶肆よ飲くとい
 茶肆或は和信の妙茶といふは家といふて入る茶
 金匱方金丹子金丹子玉枢丸錦囊方金丹龍虎奇

劫丸奇應丸延齡丹といふはさくひの龍腦鹿茸膏れ
 なる茶と用いし治痛なり時よありの醫師よありて
 痛根と云ふし茶と服しといふなりといふて
 金匱工といふなりよありの金丹といふなりは程子の
 悦よ中痛んで茶よ服しこれと痛醫といふなりこれ
 と不意なるよはしと教よしといふなりは醫の法
 ありしんあるなりしと云り庸醫といふ鹿茸膏なる
 りのありなる胎禁の茶肆と云ふは治法といふなり
 りなる或は婦といふて治しありありといふは
 のありありを害病といふ妊婦六七ヶ月よありといふ
 身の醫師よありし脈と診せしといふ茶と服しといふ

外書秘要本平聖惠方よりせり

○るち月陰陽家の院よ 正七 二八 三九 四十
五十一 六十二 七十三 八十四 九十五 一〇六 一一七 一二八 一三九 一五〇 一六一 一七二 一八三 一九四 二〇五 二一六 二二七 二三八 二四九 二六〇 二七一 二八二 二九三 三〇四 三一五 三二六 三三七 三三八 三九九 四一〇 四一一 四二二 四三三 四四四 四五五 四六六 四七七 四八八 四九九 五〇〇 五一〇 五二〇 五三〇 五四〇 五五〇 五六〇 五七〇 五八〇 五九〇 六〇〇 六一〇 六二〇 六三〇 六四〇 六五〇 六六〇 六七〇 六八〇 六九〇 七〇〇 七一〇 七二〇 七三〇 七四〇 七五〇 七六〇 七七〇 七八〇 七九〇 八〇〇 八一〇 八二〇 八三〇 八四〇 八五〇 八六〇 八七〇 八八〇 八九〇 九〇〇 九一〇 九二〇 九三〇 九四〇 九五〇 九六〇 九七〇 九八〇 九九〇 一〇〇〇

一として一周とるくよと午一歳よりの正七よ始り三月十六歳
とよとして一周とるくよと十七歳よりの正七よ始り四月二
八歳とよとして一周とるくよと十八歳よりの正七よ始り五月
婦人食方の六十三歳よりの正九歳とよと要くよりの
付くよと一として一週の内醫書よる五月とよと一週
月胎胎月とよと一週の内陽家の院よ五月とよと母
とよと一週とるくよと五月とよと一週とるくよと五月
されく正月と書きよよと一週とるくよと七月と書
を母よと一週とるくよと一週とるくよと拾枝物よ毎月
るち月とよと一週とるくよと五月とよと一週とるくよと五月

さうりものなり

○四物湯八物湯之補湯なりといふ事魚とあはれ又茶
とさうりものなり

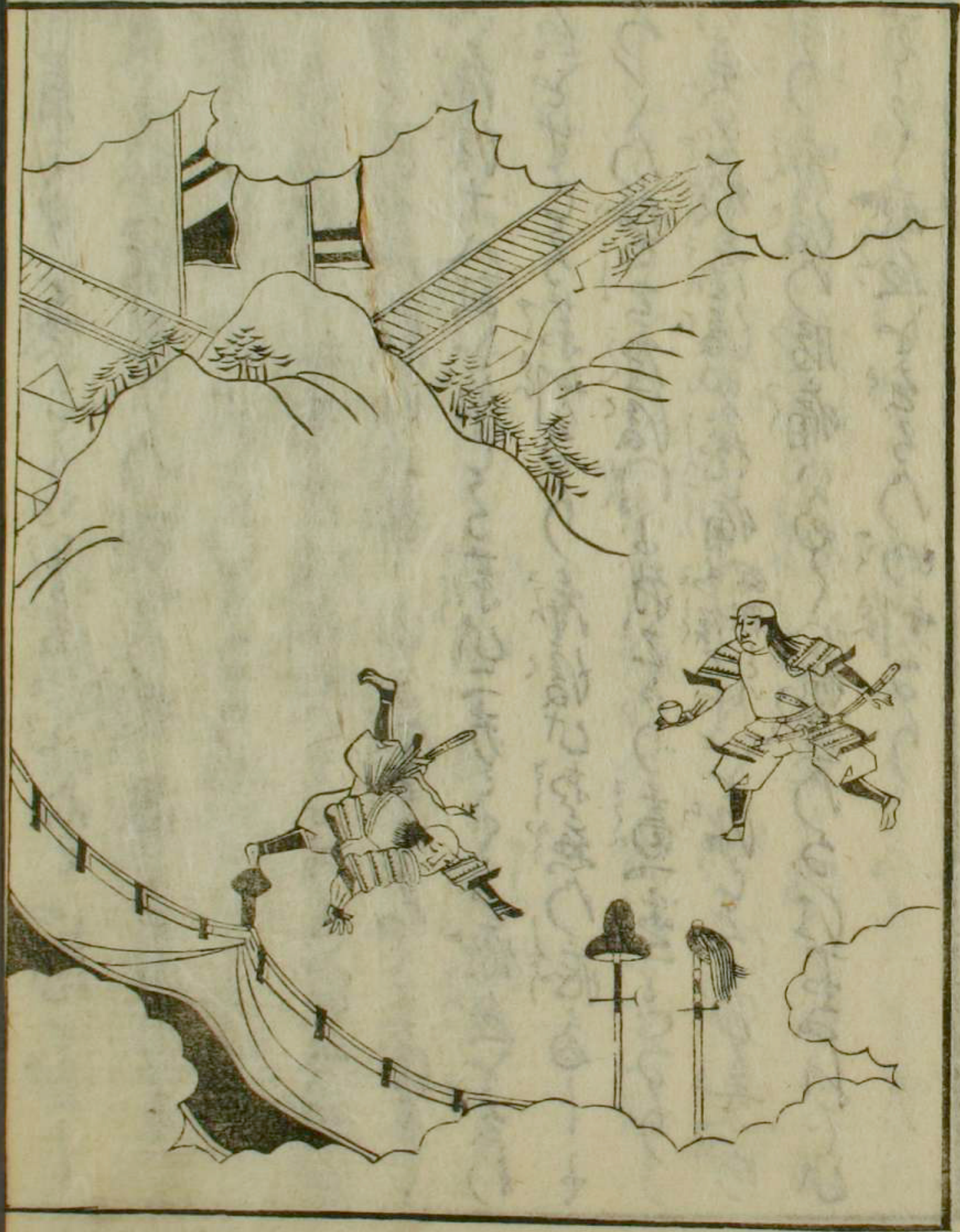
○補中益氣湯是も産後等つと數日を経ては産
後よりなれぬ妊婦なるも産後なるものいけは方
と用るものありきとて産後より又産後にも用
るものなり

○養生の薬もつとけ醫者よとて海へ載せりといふ
症もつとつとて用るものなりとて産後なるもの
醫者も相違とて養生の薬は多しとて後方所
なれ用る時節ありといふ除産後後とてなるもの

委くも載せり考合とて一平胃散の湯を産
後に加へる薬劑とて之を産後といふ事養生の
用て利とてえて善とてなるものなり

○松永渾厚の振茶といふ方あり是産後方の妙劑
なり安胎湯ありといふ松永湯もなるものなり
の振茶といふは昔の醫流にありし秘方ありといふ
加減別法は海へは傳へぬといふ事養生の金とて
と産後なるものなりとて松永氏軍中にもよく用
るものなりといふ事

○龍王湯一とて赤井茶といふ方あり此の振茶の
く産後方の妙劑なりといふ事養生の金とて



一は茶餅の白茶の肉の風茶とて合せてる方に
 して東垣先生の内生活血湯（方）の方あり
 一は心とてくまの事方なりけり方希形也
 臨中（方）の事とてて身負合瘧とてひそる方
 産後血脈（方）して身負とてめく同しけれは固り
 振来未并茶たの産後一切の急病と瘵とるなり
 是も産婦の瘵とわれくとの急作の事とてお
 治して用てさるなり

○安神散産後の事つけりありけり
 一は方八散の入門
 怔忡の妙香散とてさる方よ鹿茸香とてさる方
 刻なり若くは散とてさる方とてさる方

一用りゆと禁じりて産後起す所の忌むとむ一
或は小便大便すん所の忌む所の神用するりゆ
血とせしめずとむしりゆり

○清血散と神教産後血のまじりては或は胞子
りしに血腹痛血暈して人事とまじりて産後
の産後十八証と治する薬は二方より一産血と去り
血とせしめずとむしり産後けお無り産後一
りしに血腹痛血暈して人事とまじりて産後
○失血散産後血痛と治する薬は二方より一産血と去り
りしに血腹痛血暈して人事とまじりて産後
方より一産血と去りゆり

○朝鮮人参好するものときくると産後
脱血甚し時独走湯人參一帖とと用されしゆり
さゆりゆり産後血はくしりゆり独走湯は産
一とくると参を後分りて或は後と一帖と
さゆり

○陳香器の根は海馬の南海よも形なるゆり
とさめた可難ゆりゆりゆり産後時ゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

係書たりし一やうなり婦人父母の命を以て
聲を以てし方なり能くを以てしん

婦人妻草卷中四 終

